

「うん、頑張ってるよ、一人、いつもニコニコしている。元気で、いつも声はりあげてるわ。」

と僕は答えたが、僕も内心、兄貴が心配だった。

本当は、自分の将来も心配だった。

兄貴の事よりも、僕は、もう少し、高校生になる自分のことを思うとその恐怖感が襲ってきた。

何と言おうか、ある種の戦慄を感じた。

小学校の時のことが頭に浮かんだ。

小学校行くとき、入学式の時、僕は近所を走りやるいて逃げた。

逃げる子犬を捕まえるように、近所の男の人が隠れる僕を捜し求めた。

やっこのことで、捕まってしまう、お母ちゃんとおばあちゃんが困った顔をしているところへ連れ戻された。

無理やり、母に手を引かれ、泣き泣き、入学式に行った。

その時の怖さが帰って来た。